

研究ノート

ヴェネツィア商人たちの『商売の手引』

森 新太

はじめに

中世後期の北中部イタリアにおける都市社会の中で、国際商業に従事した商人たちは大きな役割を担っていた。都市に利益をもたらす経済活動はもちろんであるが、その経済力を背景にして大商人層は13世紀末ごろから都市内部において権力ある地位を獲得し、政治的役割を果たすようになる。一方で商人たちは、国際商業に従事する中で読み書き能力を身につけ、大いに活用し、遠隔地への書簡、日々の活動の記録、備忘録などを書き残しており、現在も多種多量の文書史料が存在している。そうした彼らの残した文書の中に『商売の手引』とよばれる類の史料文献がある。⁽¹⁾この『手引』とは、15世紀末まではイタリア都市を中心に編纂された商人文書であり、最古のもので13世紀のものが現存している。これは当時の国際商業の中心が同地域にあったことを反映しており、16世紀以降はイングランドやオランダなどに商業の重心が移るにともない、その編纂中心地も移行していく。⁽²⁾

こうした『手引』の編纂活動の初期段階、14世紀から15世紀にかけての時期には、フィレンツェを中心とするトスカナ地方が大きな役割を果たしたとされる。特に14世紀中期ごろのものとして、フィレンツェ商人ペゴロッチェの手による『手引』⁽³⁾は、その内容に含まれる地理的範囲の広さ、各市場の度量衡や商品の解説などの情報量の面で群を抜いており、この時期の代表的な『手引』とよぶにふさわしい大著である。また、一方で同時代のものでヴェネツィア商人による『商売の手引』が現存している。この両都市の商人たちの『手引』には、市

(1) 『商売の手引 il manuale di mercatura』、あるいは『商業実務 la pratica della mercatura』などとよばれる。これらは史料の原題ではなく、後世の研究者が名付けたものである。

(2) 15世紀後期以降からの出版本に関しては、以下の研究が概観を示してくれる。J. Hoock und P. Jeannin, hrsg., *Ars Mercatoria, Band 1: 1470-1600*, Scöningh, 1991. これは、1470年以降に印刷出版された『手引』を目録化し、その内容や出版地を分類することで、『手引』の歴史の変遷を探る研究である。その結果から、『手引』の編纂地の変遷のほか、その内容が商業情報の集積から、算術や簿記などの知識へと主体が変化していることを明らかにしている。

(3) Francesco Balducci Pegolotti, *La pratica della mercatura*, a cura di A. Evans, Cambridge, 1936, rep., New York, 1970.

場の解説の記述形式や含まれる内容などの点で共通点をみてとることができ、同一の著作ジャンルを形成しているといえる。⁽⁴⁾

『商売の手引』とよばれる著作ジャンルの成立の背景には、ヨーロッパ商業において12世紀ごろから漸次的に進行する、「遍歴型」から「定着型」への商業活動形態の転換がある。「定着型商業」においては、商人たちは本拠地となる都市に定住し、各地に派遣した代理人や支店と郵便網を介した連絡や情報の収集を通じて活動に従事する。その活動は必然的に広範囲化、多角化し、それにともない各市場の情報や商品に関する知識、商業技術といった精通しておくべき内容は非常に大量かつ多岐にわたるものとなった。こうした転換において商人たちは、遠隔地との書簡の交換や情報の記録といった必要性から、読み書き能力を重要視し、また習得していく。彼らはそうして身につけた読み書き能力を用い、日々変動する経済状況に応じて更新される情報や活動の記録を逐一書き残すようになる。この膨大に蓄積された情報や知識の記録を、参照しやすいように整理し、また効率的に後進へと伝達する必要から編纂されたものが、『商売の手引』あるいは実務百科であった。

『商売の手引』は、商業史の分野における史料として扱われる一方で、中世商人たちの文化活動の一環としてもとらえられる。先述したような、「書く」という行為の集大成として、幅広い知識をひとつにまとめた百科全書としての側面や、またそうした内容を後進に伝えるという教育的側面に注目する観点であり、筆者の関心もこの点による。しかしながら、こうした情報、知識の整理や伝達という理由、あるいは必要性から編纂され始める『手引』という著作ジャンルにおいて、実際にできあがった『手引』を編纂された都市ごとに考察すると、やはりそれぞれの特色や、相違点もまたはっきりとあらわれてくるのである。この点に関し、『手引』にはフィレンツェ型 libro⁽⁵⁾とヴェネツィア型 tariffa という2つの分類が可能であると、ウーゴ・トゥッチは指摘している。

筆者はこうした特色を、それぞれの都市の社会構造やその中で商人たちのおかれた立場が反映されたものであると考えている。この問題を明らかにするためには、両都市の『手引』に対する比較考察が必要であるが、本稿では、まずその前段階としてヴェネツィアの『手引』を個別に検討し、その内容の構成や編纂の過程を明らかにした上で、そこからみてとれるヴェネツィア型『手引』の特色に対して若干の考察を試みたい。

1 Zibaldone Da Canal

では、実際にヴェネツィア商人の手による『商売の手引』の内容を考察していきたい。本稿

(4) 手稿本としての『手引』の一覧は以下を参照されたい。大黒俊二「『商売の手引』、あるいは中世イタリア商人の「実務百科」」中村賢二郎編『都市の社会史』ミネルヴァ書房、1983年、244-269頁。大黒は13編の『手引』を考察し、それらに共通する編纂過程、記述形式、情報の公開・公共性という特徴を指摘している。また、次は新たに18世紀のものまでの『手引』の情報を追加し、一覧化したものである。大黒俊二「『商売の手引』一覧——13世紀から18世紀まで」『人文研究』大阪市立大学文学部、第38巻、1986年、90-108頁。

(5) Ugo Tucci, “Tariffe veneziane e libri toscani di mercatura”, *Studi Veneziani*, 10, 1968, pp. 65-108.

で取りあげる『手引』は2篇、どちらも14世紀前半のうちに原型が完成しており、ペゴロッティの『手引』と同時代のものである。

はじめに扱う『手引』は、*Zibaldone Da Canal* とよばれる史料である。⁽⁶⁾ まずこの“*Zibaldone Da Canal*”というタイトルに関して、「よばれる」と表現したのは、これが後年の研究者によって冠された題であり、原題は明らかになっていないからである。同様に、その原著者も判明しておらず、史料文書の末部に、1422年の日付とともにこの『手引』の自らの所有権を主張する書き込みをしたニコロ・ダ・カナール Niccolo da Canal という人物、あるいはその家族の名を冠する形となっている。ニコロはその署名をした時点では18、9歳であったとされ、恐らく父バルトロメオ Bartolomeo のもとで商業活動に従事し始めた若い商人であると推定されている。⁽⁷⁾ また、*Zibaldone* とは「雑録、備忘録」といった意味であり、全体として「ダ・カナールの雑記帳」といった意味合いである。

この史料を刊行したストウツシによれば、原史料である手稿は両面に書き込まれた全69枚の紙からなっており、その大部分が14世紀に編纂され、67枚目の裏面からが15世紀初めの、ニコロを含む複数の手によって書かれたものとされている。⁽⁸⁾ 14世紀の部分は巧みなゴシック体で書かれており、文頭が飾られていたりイラストが豊富に用いられていることから、専門的な筆記者の手によるものと推測できる。

オリジナルの編纂時期は、『手引』内のヴェネツィアと他の市場との度量衡の比較や貨幣の価値相場に関する項目において、そこに記されている日付と、チュニジアの貨幣における金の含有率の記述から、1311年から1331年の間であるとされている。⁽⁹⁾ この推定年代は商業に関する情報をもとにしたものであり、直接商業に関係しない内容がいつごろ書かれたものかは明らかになっていない。また以下に説明するように、この『手引』の内容は、その「雑記帳」という評価の通り、非常に多岐にわたりながら、それらが順序だててまとめられていない。ゆえにこの『手引』は14世紀初頭の商業知識や情報を中心としたオリジナルの成立から筆写、内容の更新や追加を経たものであり、14世紀を通してまとめられたものであると考える方が適切であろう。実際に、現存する史料の大部分は、1365年から1372年に製造された紙に書かれたものであるとされている。⁽¹⁰⁾

この『手引』の特徴的な点として、まず商業に直接関係しないものも含めて、非常に多岐にわたっている内容構成が挙げられる。全体の約4割が各市場の解説を含む商業の情報であり、3割弱ほどが算術指南に当てられており、これらを合わせた3分の2ほどがいわば「商人的内容」

(6) *Zibaldone Da Canal, manoscritto mercantile del sec. XIV*, a cura di A. Stussi, con studi di F. C. Lane, Th. E. Marston, O. Ore, venezia, 1967. 以下、*Zibaldone*.

(7) *Zibaldone*, p. XI. 特に脚註(5)を参照。

(8) *Zibaldone*, pp. XI-XII.

(9) *Zibaldone*, pp. XII-XIV. また史料中の該当部分は次の個所である。*Zibaldone*, pp. 41-42. ここには「1311年8月20日」という日付が記されており、これは14世紀に編纂された部において唯一見られる日付である。また、チュニジアの貨幣については次を参照されたい。Frederic C. Lane, “Manuali di mercatura e proutuari di informazioni pratiche”, *Zibaldone*, p. LV. レーンは、本史料中で報告されている金の含有率が、ペゴロッティの『手引』中の1331年時点の情報では減少していることを指摘する。

(10) Thomas E. Marston, “Descrizione del manoscritto”, *Zibaldone*, p. XLIII.

となっている。残る部分は、文学作品の写しや、ヴェネツィアの短い年代記といった文学的な記述や、占星術、薬草学、そして十戒などが含まれる教訓的な記述といった、いわば教養的な内容が占めており、最後にラテン語による習字の練習と思われる15世紀の記述が加わる形である。以下、その内容を構成にそって順番に考察していく。

『手引』は算術指南から始まる。上述のように全体の3分の1弱を占めるこのパートでは、まず「以下の計算をせよ」という形で問題が出され、その解答が続く形が繰り返しとられ、全68問が収録されている。以下にその例を挙げる。

以下の計算をせよ：もし11の $\frac{1}{3}$ が5であるならば、19の $\frac{1}{3}$ はいくらになるか？
これは、1つの数に対する同じ割合を別の数において求めるといった、同様の計算においていかなるべきかの解法である：『もし11が5になるならば、19はいくつになるか？』と言うべきである。まず19を5倍し、95を得る；これを11で割るのである。そうすると8と $\frac{7}{11}$ が得られ、これが11の $\frac{1}{3}$ が5である場合の、19の $\frac{1}{3}$ である。
また、すべての同様の計算がなされる。⁽¹¹⁾

この文章から見てとれるように、これは一種の例題であり、どのような場合に同じ考え方で計算すれば良いか、ということを示している。またこのように文字のみで示される純粋な代数問題もあれば、一方でイラスト付きで寓話的な内容を例とした問題もある。

以下の計算をせよ：50ブラッチャの高さの塔があり、その根元にはこれを登りたがっているヘビがいる。ヘビは1日に $\frac{1}{2}$ ブラッチャを登り、夜のうちに $\frac{1}{3}$ ブラッチャを滑り落ちる。私は問う：何日間で、このヘビは塔の頂上に登ることができるだろうか？
次が解法である：6という数の中に $\frac{1}{2}$ と $\frac{1}{3}$ を見出し、6日間で1ブラッチャを登ることができる、ということに気付くのは簡単であろう。6日間の50倍は300である。
ヘビは300日間で登ることができるだろう。また、すべての同様の計算がなされる。⁽¹²⁾

ここで目に付くのは、上の問題と同様に文章の最後にある、「また、すべての同様の計算がなされる」というフレーズである。この記述は算術指南において頻繁に見られるものであり、収録されている問題を例題として、実際の商業活動において応用するように、読者に強く意識づけているものといえる。また、この算術指南のパートの中に、本来であれば次の市場解説に含まれるべき、プーリアとヴェネツィアの比較対照の解説が混ざっているが、これはおそらく、それまでの算術問題の実例として挙げられたものだと考えることができる。

こうした算術指南の後には以下に示すような商品に関する知識が解説される。

(11) Zibaldone, p. 5. 無論、11の $\frac{1}{3}$ は5ではない。「 $\frac{1}{3}$ 」という数字は便宜上用いられているものであり、数式で表すならば $11:5=19:x$ となる。

(12) Zibaldone, p. 28.

スカーレット（上質な羊毛の服地）10 カンナは 38 ブラッチャにならねばならない。もし過不足がある場合は、その割合に応じて（値段を）計算しなければならず、それぞれの服地はリネンによって包まれていなければならない。

ルッカからのイーブル染めは、カンナで測られている場合、スカーレットと同様の計算をし、38 ブラッチャでなければならない。

ルッカからの朱染めは 26 ブラッチャでなければならない。

30 エルのイーブル産は 41 ブラッチャでなければならない⁽¹³⁾…。

これは各地からヴェネツィアにもたらされる布地に関して、売買されるべき基本単位を羅列しているものである。このほか、船に各種の商品を積載する際の解説があり、次にヴェネツィアを軸とした比較対照を中心とする各市場の解説が続く。

市場解説の記述はチュニスに始まり、アフリカ北岸、そしてシラクサなどのシチリアの都市、アドリア海沿岸、キプロス、アレクサンドリアやトリポリなど東地中海沿岸及びコンスタンティノーブルといった形で回り、最後はミラノとクレモナに触れている。中心となっているのは、アフリカ北岸や東地中海といった、ヴェネツィアが特に力を入れていた交易先の地域であり、著者の関心や当時の商業状況が反映されている。その一部を例に挙げる。

このようにして、リマソールとファマグスタの度量衡はヴェネツィアと等しくなる。

リマソールでは油はミロで売られており、26 と $\frac{2}{3}$ ミロがアクレでの 20 ボッカになる。そして、ヴェネツィアでは、油を売る際にミリャイオを用い、1 ミリャイオは 40 ミロになる。ゆえに、ヴェネツィアの 1 ミリャイオはリマソールの 42 と $\frac{2}{3}$ ミロになり、1 ミロはアクレでの $\frac{1}{3}$ ボッカになる⁽¹⁴⁾。

これは、キプロス島とヴェネツィアとの間で油を売買する際の重量単位の比較解説である。この市場解説のパートでは、例に挙げたものと同様の記述で各市場の解説が並べられている。

しかし、ここで注目すべき点は、こうした解説が複数の情報源をもとにしている、ということである。このことを端的に表す例を挙げる。

キプロスとヴェネツィア

ヴェネツィアの 1 マルカはファマグスタの 1 マルカ $\frac{1}{2}$ オンチャになる。キプロスでは金をサラセン人のビザント（コインの 1 種）ではかり、56 と $\frac{1}{3}$ がヴェネツィアの 1 マルカになる⁽¹⁵⁾。

(13) Zibaldone, pp. 37-41. 括弧内は筆者（以下同じ）。

(14) Zibaldone, p. 54.

(15) Zibaldone, p. 56.

これは上の例と同じく、キプロス島とヴェネツィアの解説であるが、その比較相手がリマソールからファマグスタに変わっていることがわかる。この変化の背景には、1291年のマムルーク朝による地中海東岸の都市アクレの陥落がある。拠点としてのアクレを失ったことにより、同時に地理的条件からキプロス南部の港であるリマソールの重要度が下がり、それに代わり北部のファマグスタとの関係が強まったことを反映している⁽¹⁶⁾のである。すなわち、この『手引』には時代の異なる別の情報源をもとにした、重複する内容が含まれていることがわかる。ここからも、先に述べたような『手引』の内容の漸次的な更新をみてとることができよう。

この後には中世文学作品である「トリスタンとイゾルデ」のイタリア語版の冒頭部分が続き、香辛料の特徴を記した商品知識が挟まれ、次に暦の説明や占星術、薬草学などが述べられている。そして1303年までのヴェネツィアの年代記があり、再び小アジアの都市アヤスに関する解説が置かれ、最後に神の愛を歌う詩でもって、14世紀起源とされる部分が終っている。その後には、15世紀起源とされる、祈りの言葉をラテン語で繰り返し記した部分⁽¹⁷⁾が加えられている。その中に、上述のニココロの記述が含まれているのである。

注記。1422年8月、この書は名誉あるヴェネツィア市民、著名で高貴たるバルトロメオのもとに生まれたニコライ・デ・カナーリ（原文ママ）⁽¹⁷⁾のものである。

これまでの算術指南や商品の知識、市場解説といったパートは商業に直接関する内容として、比較的まとまっているといえるが、残りの部分に関しては突然文学的内容が始まったりするなど、体系的な意図をもって編纂されたとは考えがたい。やはり、商業的内容による原型が完成した後から、様々な引用元から漸次的に追加されていったとみるほうが適切であると思われる。

2 *Tarifa zoe noticia dy pexi e mexure di luogi e tere che s'adovra marcadantia per el mondo*

次に扱う史料は *Tarifa zoe noticia dy pexi e mexure di luogi e tere che s'adovra marcadantia per el mondo* という名の『手引』⁽¹⁸⁾である。この『手引』も原著者は不明である。この『手引』の刊行版の前文を執筆したチェッシによると、現存する史料は14世紀後半から15世紀初頭の写本であり、サンマルコ財務官の文書箱の中に経営帳簿や遺贈に関する証書などと⁽¹⁹⁾ともに収められている。『手引』のオリジナルの成立時期は、本文中にあるエジプトのスルタンとの貴金属を持ち込む際の関税に関する取り決めから推測するに、1345年以降であるとされている。

(16) この点に関しては、次も参照されたい。John E. Dotson, *Merchant Culture in Fourteenth Century Venice: The Zibaldone da Canal*, New York, 1994, pp. 15-18.

(17) *Zibaldone*, p. 119.

(18) *Tarifa zoe noticia dy pexi e mexure di luogi e tere che s'adovra marcadantia per el mondo*, a cura di V. Orlandini, Venezia, 1925. 以下、*Tarifa*。

(19) *Tarifa*, pp. 4-5. なお、この刊行版は編者の名前が記されていないが、トゥッチによればオルランディーニが編集し、前文はチェッシ R. Cessi によるものである。Tucci, op. cit., p. 66.

この『手引』は全部で51の項目によって構成されており、29番目までを第1部、以降を第2部とする、2部構成となっている。また、その内容が *Zibaldone* においてもみられたような、市場解説によってほぼ占められていることは非常に特徴的である。一方で、商品に関する情報や商業にかかわる技術、その他の知識などはほとんど含まれていない。以下、その内容を順を追って説明する。

まず第1部は「これらがヴェネツィアにおける重量単位である」という書き出しから、ヴェネツィア自体の市場解説によって始まる。⁽²⁰⁾その後、コンスタンティノープルやターナ、アレクサンドリア、ダマスクス、カンディアといった東地中海の市場が解説され、ナポリ、シチリア、アンコナといったイタリア半島の市場や、マジョルカやモンペリエ、パリの西ヨーロッパの市場が挙がり、最後にネグロポンテの解説をもって終わっている。次に挙げるものは、キプロス島とヴェネツィアとの比較を示す解説である。

ファマグスタとヴェネツィア

ファマグスタで、ソッティリ（の秤）で大量の香辛料を売るならば、（当地の単位は）カントロとルオトーロ（共に重さの単位）になる；100ルオトーロが1カントロになり、12オンチャが1ルオトーロになり、⁽²¹⁾上述のカントロはヴェネツィアでは750リブラ・ソッティリになる。

このようにこちらの『手引』でも、*Zibaldone* における市場解説とほぼ同様に、ヴェネツィアにおける度量衡と現地のを比較する形の記述で解説がなされている。こうした市場解説における記述形式は、ヴェネツィアの『手引』のみにみられるものではなく、同時代のフィレンツェの史料にもみられるものであり、『商売の手引』という著作ジャンル全体に共通するものである。同様に、その内容が及んでいる地理的範囲や、市場の取捨選択も、やはりヴェネツィア商人の関心を反映しているといえよう。このことから、第1部だけをみれば、この『手引』は単純に市場解説だけに内容をしぼったものとしてとらえることができる。しかし、第2部とあわせて考察してみると、この『手引』がもつ特色が明らかになるのである。

第2部はコンスタンティノープルとヴェネツィアとを比較した解説から始まる。⁽²²⁾続いてターナとファマグスタ、そしてネグロポンテ、カンディア、ダマスクス、マジョルカといった市場が挙げられ、ジェノヴァの市場解説を述べて終わっている。ここに挙げた市場の名前をみても分かるように、第2部の内容は多くの部分で第1部と重複している。また、挙げられる市場だけではなく、解説される内容もほぼ似通っているのである。以下にその例を挙げる。

(20) *Tarifa*, p. 11.

(21) *Tarifa*, p. 22.

(22) *Tarifa*, p. 41. 「コンスタンティノープルとヴェネツィア」という見出しから、両市場の度量衡の比較がおこなわれる。なお、コンスタンティノープルについては、既に第1部で述べられている。*Tarifa*, pp. 14-17.

ファミグスタとヴェネツィア

ファミグスタで、胡椒、ジンジャー、サンダラック（樹脂）、ラッカ（染料）、肉桂、砂糖、その他大量の香辛料はカンタロで売られ、1カンタロは100ルオトー口になり、1ルオトー口は12オンチャになり、1オンチャは44ペーシになる。また、上述の1カンタロはヴェネツィアでは750リブラ・ソッティリになる。⁽²³⁾

第1部で挙げた例と比較してみると、その内容や、書かれている数値が同じであることが分かる。こうした市場解説の後、巻末に香辛料に関する知識のパートが置かれている。

この点に関しチェッシは、第1部は第2部よりも後の時代のものであり、また、その内容は第2部の要約とほかの情報源からの引用をあわせたものであると述べている。チェッシの説明によれば、第2部は比較的独自性のある内容であり、巻末の香辛料に関するパートは、その記述形式のみならず、扱っている内容がペゴロツィの『手引』とほぼ似通っていることから、第1部の編纂時期より前にまず後半部がペゴロツィと同時代に編纂された。また、第1部の扱う内容の地理的範囲が地中海沿岸のみならず、フランドル地方にまで及んでいること、そして何よりも分量が多いことから、第1部は第2部をもとにし、情報の追加や更新をおこなうことで成立したものであると考察している。⁽²⁴⁾ こうした点から、この『手引』は、1人の商人の何らかの意図により体系的にまとめられたものではなく、いわば寄せ集め的に成立したものと見えよう。

3 ヴェネツィアの『手引』の特色とその考察

以上、2編のヴェネツィアの『商売の手引』を考察したが、この両者に共通していることは、先に存在していた『手引』やそのほかの情報源を引用するだけにとどまらず、内容を追加、または更新することで徐々に形成された、という点である。両者の原型が成立したとされる年代には、最短で10年、最長で30年ほどの開きがあるが、その間の商業情勢の変化が明確に反映されていることが、たとえば上に例として挙げた記述の中で、既に13世紀末には陥落していたアクレやそれに関連してリマソールに関し、*Zibaldone* は言及している一方、*Tarifa* ではこれらの地名が登場しないことからわかる。⁽²⁵⁾ 一方で、1人の商人が著者として情報や知識を体系だてて、いわば1冊の書物としてまとめようとする意図は両者ともみうけられない。この点に対し、上述のトゥッチの指摘は非常に興味深いものである。

先に述べたように、トゥッチはフィレンツェ型の『手引』を *libro* とするのに対し、ヴェネツィア型の『手引』を特徴づける言葉として *tariffa* を挙げている。*tariffa* とは、現代イタリア語では関税表や料金表と言う意味をもつが、もとはアラビア起源の単語であり、ここでは報

(23) *Tarifa*, p. 52.

(24) *Tarifa*, pp. 5-6. チェッシは第1部を、第2部とペゴロツィの『手引』の「寄せ集め *centone*」であると述べている。

(25) 上に挙げた例をそれぞれ参照されたい。本稿註(14)、(15)、(23)。

せ notizie や一覽 notificazione という言葉に近い意味を持っていると述べる。また、そこには情報を公にする、もしくは拡散するという意味が含まれているともしている⁽²⁶⁾。トゥッチや、Zibaldone に考察を加え、その英訳版を刊行したドットソンは、この両者の違いが生じる理由を、それぞれが編纂された両都市の経済活動の形態に求めている。すなわち、国際商業が大アルテを形成するいくつかの強大な大商会によって占められていたフィレンツェでは、そうした大商会所属の商人が独自に編纂し、商会内で参照される私的な書物として『手引』が編纂され、その一方で、数多くの中小商会が都市当局の管理下のもとで国際商業に従事していたヴェネツィアでは、『手引』は幅広く出回り、特定の商会に属する事のない「公的」な性格を持つように編纂されたのだとし、ヴェネツィア型の tariffa は、不特定多数の商人や商会が同時に1つの事業に従事する同都市において、商業における知識や伝統、態度などの共通の基盤を与えるものとして存在していた、と捉えているのである⁽²⁷⁾。

この説明は、たしかにある程度の有効性をもっているといえよう。内容の重複や情報の更新がその特徴としてみられるヴェネツィアの『手引』は、書物としての体系性よりも利便性を重視し、おそらくは出回っていたであろう個々の情報を複数の商人の手により必要に応じて組み込む形で tariffa として漸次的に形成され、またそれを他の分野の知識や情報と組み合わせることで Zibaldone のような形になったと考えることはできる。しかし、フィレンツェ商人であるペゴロッチェの手による『手引』を参照していたと思われる Tarifa の例からもわかるように、フィレンツェの『手引』も決して秘匿されていた、私的書物であるとはいえず、この点において、さらなる説明が必要であろう。

筆者は、それを明らかにする手がかりとして、両都市における商人がおかれた社会的立場が関連しているのではないかと考えている。ヴェネツィアにおいて国際商業に従事していた商人は、貴族あるいは上層市民として、固定化された社会的階層に属していた。いいかえれば、ヴェネツィアにおいては金儲けの仕事、すなわち商人は何らの知的弁論を必要としない、ということである⁽²⁸⁾。では、こうした後ろ盾のないほかの都市の商人たちは、いかにして都市社会における権威を確立することができるのか。筆者はこの点にこそ、特にフィレンツェにおいて『商売の手引』が、ヴェネツィアのものにはみられない書物の形をもって編纂された理由があると推察する。中世において書物は、知識やそれを有する職業の名誉を象徴するものであり、フィレンツェ商人たちは、ヴェネツィア商人には必要のなかった、みずからの職業の権威づけという行為を『商売の手引』を用いておこなった、と考えるが、この点に関しては別稿にて展開したい。

(26) Tucci, op. cit., pp. 89-90. トゥッチはこの tariffa という言葉には、libro には無い「義務づけ obbligatorietà」の意味合いが含まれる、と述べている。

(27) Tucci, op. cit., pp. 90-92; Dotson, op. cit., pp. 24-27.

(28) 例えばマクニールは、ヴェネツィアにおける中世末期の文化交流に関する概説の中で、以下のように表現している。「ヴェネツィアが制度的に安定しているため、…金もうけの仕事は、なんら知的弁論を必要としない。昔からの慣習がそれを完全に是認しているからである。」W. H. マクニール著、清水廣一郎訳『ヴェネツィア——東西ヨーロッパのかなめ、1081-1797』岩波現代選書、1979年、111頁。

おわりに

本稿では、14世紀に編纂されたヴェネツィアの『商売の手引』を扱い、その内容を個別に考察し、そこからみてとれる共通点を同都市の『手引』のもつ特色として明らかにした。また、その特色はヴェネツィアの『手引』に限定すれば、先行する研究の見解とも一致するといえる。しかし、商人として知っておくべき膨大な情報や知識の整理と効率的な伝達のため、といった編纂理由が同じであるにもかかわらず、同時代のフィレンツェの『手引』とは異なる形をとって編纂されていることに関し、いまだ考察の余地は残っている。以後、本稿と同様の考察をフィレンツェにおいて編纂された『手引』⁽²⁹⁾にもおこない、その特色を明らかにしたうえで両者を比較する必要があることはいうまでもない。

(29) 本稿で触れたペゴロッチェの『手引』以外にも、14世紀から15世紀までにフィレンツェ商人の手によって編纂された『手引』には、例えば以下のようなものがある。Saminiato de' Ricci, *Il manuale di mercatura di Saminiato de' Ricci*, a cura di A. Borlandi, Genova, 1963; Giorgio di Lorenzo Chiarini, *El libro di mercantantie et usanze de' paesi*, a cura di F. Borlandi, Torino, 1936, ristampa, Torino, 1970.